

【もう一步、足りないこと】

絶望している本田に対し、1人だけ手を差し伸べる社員がいた。
前職から一緒に、株式会社 AAA を共に立ち上げた中村である。

「社長、株式会社 AAA はもう駄目なんですか？」

「ああ中村か。もう駄目だよ。ごめんな、お前にまで迷惑をかけてしまった…
全部オレのせいなんだ。ごめんな中村」

「社長… もう一度一からやり直しませんか？会社を立ち上げた時、オレ社長と 2 人だったじゃないですか。スゴク忙しかったし一杯怒られたけど、楽しかったなあ」

「中村… 許してくれるのか…？ こんなオレを…」

「おれ、あの頃の社長好きでした。もう一度、あの頃のようにやりましょうよ」

「中村… ありがとう…ありがとう、ありがとう、ありがとう…」

ひと粒の涙が本田の頬をつたい落ちると、こらえていた感情が溢れ出し、しばらくの間、本田の涙は止まらなかった。

改心した本田は、社員のこと、クライアントのことを本気で考えて仕事に取り組むようになる。

しかし、今回は敢えて改心宣言はしなかった。

それをしても、誰もその言葉を信じるとは思えなかったし、行動で示すしか社員の信頼を回復する方法はないと思ったからだ。

社員からはそっぽを向かれようとも、目を見てあいさつし続けた。

心ない返事が返ってきても、毎日全員に声をかけ続けた。

朝は誰よりも早く出社し、社員全員の机を雑巾がけした。

風になびくのが気に入っていた長い髪も、短く切った。

本田は辛抱強く努力を続けた。

一度離れた社員の心をもう一度つかむのは難しい。とても時間がかかる。

しかし、本田は辛抱を続けた。

「これはオレが撒いたタネだ。オレが行動で示して信頼を取り戻すしかない」
そんな本田に、社員たちは少しずつ心を開いていく。

そして1年の時間をかけ、ようやく社内の雰囲気はよくなる。
本田と社員の会話も増え、自然なあいさつもできるようになった。
そして、本田は1年ぶりに社員たちと酒を飲みに行った。

「社長、ボク誤解していました。
1年前、社長はオレたちのこと道具としか見てないんだと思ったんです。
でもそれは間違いだったみたいです。ボク今は仕事楽しいです！」

「そうか。それはよかったな。
でも1年前のことは誤解ではないよ。あの時はオレどうかしてたみたいなんだ。
まあ、あの事件のおかげで気づけたんだけどな…皆には本当に迷惑かけてしまった
な…」

そんな話ができるようになるとは、本田は思っていなかった。
ささいな会話でも本田には嬉しい瞬間であった。

そして、業績も少しずつ回復してきていた。

* * * * *

「どうも、こんにちは、本田さんはいらっしゃいますか？」
「本田でしょうか？少々お待ちくださいませ。失礼ですが、お名前を頂いても…」
「平川と申します」
「はい、平川さまですね。お掛けになってお待ちくださいませ」

ある日の夕方、株式会社AAAに突然平川が訪ねてきた。

「本田さんこんにちは。ご無沙汰しています」
「あ！平川さん、ご無沙汰しています」

「最近の調子はいかがですか？心配で来てしまいましたよ」

「ええ、実は色々と事件があったんですが、今はうまくいっています」

「そうか、それはよかったです。『7つのH』がお役に立てたようですね」

「あ、そうです。『7つのH』のおかげです」

本田は、この1年色々な事がありすぎて『7つのH』の事はすっかり忘れていた。

「社長、この案件なんですが……」

「おお田中さん。これか、これは明日でいいよ。今日はもう遅いな」

「はい、じゃあ明日にします。お疲れさまでした」

ピクリ。

平川の頬が少しだけ引きつった。

「本田さん！」

「はい平川さん、何でしょう？」

「本田さんちょっと勘違いしてませんか？」

「えっ!？」

「さっきの案件、お客さまにはいつまで提出しなきゃいけないんですか？」

「いや、知りませんが……」

「さっきから思っていたのですが、このオフィスからは緊張感が感じられません。

楽しさを大切にされようとしているのは分かるのですが、皆さん、少しカン違いしているようですね。」

「いえ……そんなことはないと思いますが……」

その瞬間、平川の目はカッと見開き、本田の目をキツを見つめた。

「実は、入口で本田さんを待っている間にも感じるがありました。

今日はこんなに晴れているのに、傘立ては満杯です。

お客さまの忘れものなどをずっと放置しているのではないですか？」

「あっ……それは……」

「社員さんの机には食べかけのお菓子が置かれていますね？ 今は休憩時間ですか？

本田さんの会社では、就業時間でもお菓子を食べながら仕事をするのですか？」

「い、いえ…」

「窓際を見てください、社員さんが5人も固まって談笑をしている。

私が来てからずっとですよ。あれはミーティングですか？」

「いや…そうではないと思います…」

「本田さん、今どれくらい集中して仕事していますか？

どれだけ本気で頑張っていると言えますか？ どれだけの量仕事していますか？

本田さんの会社にそんな余裕がありますか？ 社員の皆さんはどんな意識で仕事をしていますか？」

「え・・・いや・・・あの」

「今の業績はどのくらいでしょう？」

「はい・・・ピーク時の80%くらいです」

「本田さん!! それで満足しているのですか？

それで社員さんのお給料を上げられますか？ それで社員さんは幸せになれますか？

そんな働き方でお客さまは幸せになれるのですか？

本当に、それが本田さんの目指していることなんですか？」

「……………」

本田には返す言葉が無い。

社員の反発を恐れ、気を使うあまり、本田は言いたいことも言えなくなっていた。

甘い社長に社員は甘え切っていた。なあなあ組織であった。

平川は大きく息を吸って、胸を落ち着かせるようにした。

そして、本田に言った。

「本田さん、良いとこまで来てるんですよ。社員さんとの信頼関係は築けたようですね。

これからは本当に社員のことを想って厳しくなってください。社員の将来を考えたらきっと行動が変わるはずですよ。あと一歩ですよ。本田さんならできます！」

「はい。平川さん、ありがとうございました」

本田は、言葉は違うが平川と岡田にどこか似ている所を感じた。
厳しいが何だか温かい。上司のような頼もしい存在感がある。

あと一步。

この一步が、本田にとって大きな一步となっていく。

<取材・執筆：物語ライティング>